



Title	サハとアイヌの口琴を巡る「音文化」の人類学的研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	荻原, 小百合
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11039号
Issue Date	2013-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53195
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Sayuri_Ehara_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（文学）

氏名 荏原小百合

学位論文題名

サハとアイヌの口琴を巡る「音文化」の人類学的研究

本論文は音大出身の演奏者でもある荏原氏が、アイヌのムックリとサハ共和国のホムスという口琴に関わる人々の実践にみずから参加し、それらを長期にわたり参与観察することによって詳細に記述したもので、理論的枠組みとしては「音文化」概念を拡張するアクター・ネットワーク論（ANT）やアサンブラージュ論、さらには共働の音楽生成論を用いている。

第1章では、研究目的として音楽実践研究の重要性が述べられ、同じ構造の楽器を持つ二つの民族集団における音楽実践を参与観察によって記述し、それらがエスニックな枠を超えて出会った際に、各アクターがどのような意味を持ちどのような反応や共鳴が生じるかを明らかにすることが述べられる。さらに本研究を始めることになった研究経緯や、音楽人類学・民族音楽学、音文化研究、ポスト社会主義研究、アクター・ネットワーク論、共働の音楽生成論などの先行研究の検討が行われる。

第2章では、塘路口琴研究会あそう会誕生の背景としてのベカンベ祭りを、塘路におけるアイヌ音楽の潜在的な活動、つまりあそう会を生み出す背景として位置づける。ベカンベ祭りは、塘路で古くから行なわれてきたベカンベ（菱の実）収穫に関する儀礼である。1990年を最後に現在は途絶えているベカンベ祭りを巡って、祭りの流れや、祭りを巡る経緯、ベカンベ祭り以外に塘路で行なわれていた可能性のある儀礼を整理する。そして現在祭りが行われていない理由として、観光化、地域的要因、伝統への固執という点を指摘している。

第3章では、塘路における唯一のアイヌ音楽文化伝承団体である塘路口琴研究会あそう会の設立の経緯と活動について概観する。あそう会は、磯嶋恵美子氏（初代会長 2004 年死去）の 1991 年の第2回国際口琴大会（開催地：サハ）への参加を契機に 1994 年に有志で訪問したサハでのホムシスト（口琴演奏家）との交流から設立され、あそう会の名称もサハの「オフオカイ」輪舞からヒントを得て考案されている。あそう会の活動はこれまで、第一にムックリの演奏や制作技術を身につけること、第二にサハのホムシストとの交流が主として行なわれてきた。サハとの演奏交流の意義は、現会長諏訪良光氏によって竹のホムスが制作され、また磯嶋氏らがムックリには無かった演奏方法でサハのホムスの演奏からカッコウの鳴き声の声門の開閉の手法を取り入れたことにも具体的な変化として現れているとされる。

第4章では、北海道大学におけるアイヌの「音文化」に関する博物館展示を取り上げている。ここでは北大総合博物館という〈場〉で、学生、あそう会、来館者、モノが織り成す展示過程において、最初は学生側だけの視点から展開されていた展示企画が、学生が製作技術を学習することを通じて、展示企画に結びつけてゆく過程となったことを詳細に記述している。これらの参与観察から、北大におけるアイヌ（塘路）の「音文化」に関する展示が双方向的に交流が繰り返される〈場〉となり、そこで楽器の制作方法や演奏方法の技術が蓄積され、段階的に知識や理解の共有を可能にし、そのことを土台に共働の音楽生成（展示）が可能になったと指摘している。

第 5 章では、サハにおいてホムスの世界を生み出しているネットワークを構成するアクターについて明らかにしている。また、サハ音楽のジャンル、ホムスの種類、ホムスの構造、演奏法、レパートリーについて概説している。そして、社会主義崩壊前後から始まったホムスの制作・演奏に関する復興運動において常に中心的な役割を果たしてきた、イヴァン・アレクセイエフ氏について詳しく記述している。そのほか、鍛冶師、行政、博物館、教育、メディア、国際口琴協会、サハの自然、ホムスに関する学術的側面、聴衆についても概説している。

第 6 章では、第 5 章で明らかにしたホムスを巡るヒトやモノが結びついて、サハ共和国が国家的に関わってきた世界的なイベントである国際口琴大会などが生み出されてきた経緯について、ホムス、ホムシスト、ホムスチュット（ホムスを弾く人）、鍛冶師、行政、博物館、作品、教育、メディア、国際口琴協会、自然、アイヌ、ムックリ、学術、聴衆が関係して生まれるネットワークの展開と、口琴をめぐる出来事の生成について考察している。第 2 回国際口琴大会（1991 年：開催地サハ）ではネットワークの中心はアレクセイエフ氏であり、主要なイベントは氏が中心となり、そのアイデアを鍛冶師、ホムシスト、ホムスチュットが支持し、実現してゆく過程であった。しかし第 7 回大会では、オランダでの理事会におけるサハ開催の提案、その後のサハ全土への周知（ホムス博物館を通じて鍛冶師、全国のホムシスト、全国の教育者、ホムスチュットへ拡大した）、予算の拡大の為行政に働きかけるホムシストなどにおいて、それぞれのアクターが主体的に動いていた。またその過程では、サハの知識人のクラコフスキーの詩が、新聞、参加者に配られたパンフレッドに印刷され、再三サハのホムスや自然とホムスを繋ぐ役目として、何度も取り上げられていた。第 7 回大会最大のイベント「ギネスに挑戦・1000 人の口琴同時演奏」では、アレクセイエフ氏らの「オフオカイ」をともに演奏する共働の音楽生成を成し遂げた。そこでは、1991 年に磯嶋氏らが参加して以来のアイヌやムックリも、サハのホムス・ネットワークの一部となっていた。

第 7 章では、このような世界規模の国際大会を下支えした一人のホムスチュット（個人）、ピョートル・シシーギンについて取り上げている。そして一人の個人が、塘路の自然、ムックリ、あそう会、聴衆、ホムス、サハの自然、ホムシスト、ホムスチュット、教育、行政がネットワークとしてこの個人を結節点としてつながり、長い年月を経て円環する様相を検討している。

結論部となる第 8 章では、各章を総括した上で、サハとの演奏交流から生まれたあそう会について、磯嶋恵美子氏が会長をつとめた時代を第一期とし、第一期のあそう会は、磯嶋恵美子氏の活動を土台に、サハとの演奏交流のため過渡的に生まれた団体と分析している。第二期は 2004 年に磯嶋氏が亡くなって以降であり、諏訪氏が会長を引き継ぎ、ムックリの制作指導等を中心とした活動が展開されてゆく。アイヌとサハの交流は、塘路の自然とつながるアイヌと、サハの自然とつながるホムシストたちとの間で織り成され、双方向の音に関わる交流がなされている。このような交流は、竹と金属で互いに同じ構造を持つ楽器を通じて、少しずつ違う音の有り様を共に演奏し共鳴し合う〈場〉を継続して持つという、共働の音楽生成の事例として理解される。

また第 7 回国際口琴大会開催の経緯を、アクター・ネットワーク論を援用することで包括的に理解することを試みている。ホムスを巡るネットワークは、中心をもたないヒトとモノのネットワークとして成立し、1,344 人のギネス演奏のような出来事を生みだしていった。また、サハのホムスは、サハの大地から出土した鉄を使用して鍛冶師が制作し、鉄が歌いサハの大地が歌っていると解釈される。ここでは、モノとしてのホムスと、自然の世界がネットワークを作りながら、人々と関連してホムスの世界が作り出されている。